

エセンツ・フィルハーモニカー
特別公演

2022.8.7

所沢市民文化センターミュージズ アークホール

本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。

客席内では、携帯電話・スマートフォン等電子機器の電源をお切りください。

また、演奏中の出入りや場内の撮影・録音・録画はご遠慮ください。

全てのお客様が演奏をお楽しみいただけるよう、皆様のご協力をお願いいたします。

プログラム

Gustav Mahler Symphony No.9 in D major

I . Andante comodo

II . Im Tempo eines gemächlichen Ländlers.

Etwas täppisch und sehr derb

III. Rondo-Burleske: Allegro assai. Sehr trotzig

IV. Adagio. Sehr langsam und noch zurückhaltend

交響曲第9番 ニ長調 / グスタフ・マーラー

第1楽章 アンダンテ・コモド

第2楽章 ゆるやかなレントラーのテンポで

第3楽章 ロンド・ブルレスケ：アレグロ・アッサイ 非常に大胆に

第4楽章 アダージョ：非常にゆっくり、そして控え目に

指揮 : 齊藤 栄一

コンサートマスター：森 勇人



指揮 齊藤 栄一

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間にわたり、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルク音楽祭などにて指揮。

82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲『ねじの回転』（関西初演）の副指揮者を務める。84年には、一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成された水星交響楽団の常任指揮者に設立当初から就任。現在に至る。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共演で、佐多達枝振り付けのバレエ『カルミナ・ブラーナ』（95年、東京文化会館）、『ダフニスとクロエ』（99年、新宿文化センター）を指揮した。その後、『カルミナ・ブラーナ』のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの『トリオンフィ』3部作（4台のピアノと打楽器版に自ら編曲）を指揮している。

また、作曲・編曲も手掛け、一橋大学管弦楽団創立100周年記念委嘱作品の『前奏曲』、『スーダラ節の主題による交響的変容』などの管弦楽曲のほか、『シンフォニエッタ』（金管十重奏曲）、『ミサ・ブレヴィス』（無伴奏合唱曲）、バーンスタイン作曲『ウエスト・サイド・ストーリー』より『もうひとつのシンフォニックダンス』、TVアニメーション『赤毛のアン』エンディングテーマの三善晃作曲『さめない夢』の管弦楽版などがある。

現在、明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に、『往還する視線 - 14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学』（近代文芸社）、『振っても書いてもしょせん酔狂』（水響興満新報社）がある。



©Takashi Fujimoto

エセンツ・フィルハーモニカー Essentz Philharmoniker

2020年、一橋大学管弦楽団の若手OB・OGを中心に結成。

第1回記念演奏会ではシューマン「ライン」とベートーヴェン「運命」を、2022年3月に行われた第2回演奏会ではラフマニノフのピアノ協奏曲第2番とブルックナーの交響曲第4番を演奏した。

今回が3回目の演奏会となる。

団名に冠したエセンツ(独語: Essenz)は「本質・真髄」といった意味を持つ。



運営委員長 清水颯太

本日はエセンツ・フィルハーモニカー特別公演にご来場いただき、誠にありがとうございます。

当団はメンバーのほとんどを一橋大学管弦楽団の現役団員及び出身者が占めており、この一橋オケには年末年始にマーラーの交響曲第9番（マラ9）を有志で演奏するという文化があります。しかしな

がら、新型コロナウイルス感染症の影響で、2021年の年始に開催予定だったマラ9演奏会は中止を余儀なくされました。「4年かけて一人前のマラ9弾きになる」という至上命題を課せられた一部の団員にとって、毎年演奏するのが当たり前だと思っていたマラ9を演奏できなかったことは痛恨の極みであり、私自身なんともやるせない気持ちのまま学生を卒業し社会に出ていくこととなりました。

「どうしてもマラ9がやりたい」その気持ちが抑えられず、ではこのエセンツ・フィルでやっしまおう！ということで、今回の特別公演が企画された訳であります。このエセンツ・フィルは結成以来、シューマン、ベートーヴェン、ラフマニノフ、ブルックナーの楽曲に取り組んできており、満を持して(?)のマーラー演奏となります。メンバーは平均5回ほどのマラ9演奏経験があり(異常)、各々が自分の“マラ9”を持ちつつも、それが合わさった時に果たしてどのような音楽が生まれるのか、一奏者の立場でありながら非常に楽しみです。ご来場いただいた皆様とも、マーラーの世界、殊にマラ9の世界を共有できれば幸いです。

謎解き「第9交響曲」(マーラー編)

解説：齊藤 栄一

マーラーが完成させた最後の交響曲である交響曲第9番(1911年)は、通例どおり4つの楽章から構成されていますが、その内容はマーラーのみならず、それまで作曲されたいかなる交響曲とも異なった特異な姿をしています。

さっそく第1楽章から見てゆきましょう。ベートーヴェンやブラームスの交響曲の第1楽章でおなじみなのがソナタ形式ですね。第1主題と第2主題からなる提示部、それをもとに自由に構成される展開部、提示部の再現を基本とする再現部、そしてコーダ(終結部)というものです。ちなみに、「運命」のあだ名で知られるベートーヴェンの交響曲第5番の第1楽章の構成を見てみましょう。提示部に費やされている小節数が124、展開部が125、再現部が125、コーダが129と、美しいと言いたくなるほどの均斉がとれています。それではマーラーの場合はどうでしょうか。提示部が107、展開部がその2.5倍近い240、再現部は提示部の3分の1以下の29、そしてコーダが78となっています。相当にいびつですね。

異様なのはそれだけではありません。第1主題が出てくるまでの6小節からなる序奏がすべて、第1楽章全体でそこかしこに用いられる重要なモチーフ(動機)だけで構成されているのです。まず、冒頭でチェロとホルンによりモチーフ①が奏されます。

①  (1・数字は小節番号、以下同様)

つぎにハープでモチーフ②が

②  (3)

ついでホルンによってモチーフ③が

③  (4)

そしてヴィオラによってモチーフ④が示され

④  (5)

6小節目の最後からついに第1主題が第2ヴァイオリンとともに姿を現します。



て突然立ちあられるあたりから景色はにわかにならなくなってゆき (314)、響きはゆっくりゆっくりと平穏なものへと変化してゆきます。そして、モチーフ②が協会の鐘の音を思わせる 3 つのグロッケンによって奏でられるあたりから、冒頭の穏やかな世界への帰還にたいする期待はますます高まってゆき (337)、ついに第 2 ヴァイオリンが第 1 主題とともに私たちに再現部へと導いてくれます (347)。

ただ、この展開部のなかでは、それまでなかった新しいモチーフが導入されています。それは、



というものであり、「長 2 度の下降音型」をその後半に含むこのモチーフはこの楽章の末尾で生かされることになります。

さて、古典派の交響曲では再現部は提示部と同じだけの重要性をもたされているのが通例ですが、マーラーはここでは第 1 主題には 25 小節、第 2 主題にいたってはわずかに 4 小節 (372) しか割いていません。

そして、音楽はとつぜん場面転換して、不思議な響きをもつコーダへと入ってゆきます (376)。フルートとホルンと低弦のミステリオーズ (神秘的に) と銘打たれた謎めいた会話ののち、オーケストラは少し波立ちますが、それもいつしか穏やかなものとなり、いくつかの管楽器とヴァイオリンのソロののち、この楽章はチェロの高音のフラジオレットとピッコロのユニゾンという変わった組み合わせで静かに閉じられます。

このコーダは少し変わった性格を持っています。というのは、そこでは提示部の冒頭で示されたモチーフや主題はいっさい用いられず、そのかわりにはっきりとした形を聞くことができるのは、提示部の途中で 1 回顔を出すだけのモチーフ⑤ (398 以降のホルン、412 のホルン) と展開部で初めて登場するモチーフ⑥ (434 以降の独創ヴァイオリンとオーボエ) だけなのです。それでも、いちばん最後には、クラリネット、独奏ヴァイオリン、第 2・第 4 ホルン、オーボエとたたみかけるように、第 1 主題の最初のふたつの音、すなわち「長 2 度の下降音型」



が繰り返されて、この楽章の末尾が冒頭としっかり結びついていることが示されます。

さあ、第 2 楽章にいてみましょう。この楽章は 3 種類の性格の異なる舞曲から構成されていますが、まず 5 つの音からなる上行音型



とそれに応えるモチーフ (「長 2 度の下降音型」が連結されたもの！)



の組み合わせからなる序奏がしばらく続いたあと、舞曲 A が第 2 ヴァイオリンで奏されます。



このテンポが遅めの舞曲はレントラーといって、ワルツが流行する前にヨーロッパで好まれていた、庶民階級に由来するものです。これがひとしきり続くと、突然舞曲 B が現れます。



速いテンポのこの舞曲は頻繁に登場する例の「ブンチャッチャツ」という伴奏の音型からいってもワルツにはほかなりませんが、その形はモチーフ⑨に由来するものであり、当然モチーフ⑦がその根底にあるということも言うまでもありません。そしてワルツとしては相当やんちゃな響きが続いたあと急ブレーキがかかり、こんどは舞曲 C が登場します。



これは舞曲 A よりもさらにテンポの遅いレントラーですが、誰の眼にも明らかなように、もう露骨なまでのモチーフ⑦の繰り返しです。このあとは (230)、この 3 つの舞曲が A・C・B・C・A・B・A の順で変容を受けながら展開していったあと、ピッコロとコントラ・ファゴットが、今のは全部冗談だったんだよとでも言うかのようにモチーフ⑧を奏でてこの楽章をこの楽章を閉じます。

第 3 楽章は「 Rond = ブレスケ」と題されています。ブレスケとは「茶番喜劇」とか「道化芝居」といった意味の言葉ですが、その命名にたがわず、中間部の静かな世界をドンチャン騒ぎの音楽がはさみこむ構造になっています。トランペットに先導された 6 小節間の序奏に続いてヴァイオリンによる主題 A



が現れます。このなんともギクシャクした主題がさまざまに形を変えて音楽が進んでゆくと、やがて A にくらべればかなり穏やかな主題 B が登場します。



この主題の拍頭の音を取り出してみると、ラーソ、ソーファ、ファ→ミ♭、ミ♭→レ♭となり、なんと「長2度の下降音型」の4連発となっています。しかし、その穏やかな世界も長くは続きません。一発のシンバルの轟音とともにふたたび主題Aが炸裂します(180)。

ところで、以下にかかげるのは、ヨハン・シュトラウス(父)が作曲した、かの有名な「ラデツキー行進曲」の一部です。そう、毎年元日に行なわれるウィーン・フィルのニュー・イヤー・コンサートで最後に必ず演奏されるあれですね。





そして、このゆったりとした中間部でさまざまな楽器によって何度となく繰り返される音型こそ、モチーフ⑩にほかなりません。

しかし、この甘い夢のなかにも主題 A の亡霊がしのびこんでくるようになり (472)、局面が徐々に不安なものになってきたときに、トロンボーンと低弦とによって私たちはふたたびブルスケの世界へと突如連れ戻されます (522)。その直後に木管楽器とホルンが次のようなメロディを奏でます (526)。



そして、以下にかかげるのが、先の「ラデツキー行進曲」の一部です。



どうです。そっくりでしょう。しかもシュトラウスの原曲はイ長調なのにマーラーのものはイ短調で、これはもう、堂々たるパロディと言うほかありません。そう言えば、184 小節のホルンに出てくるようなモチーフ



がこの楽章では頻出しますが、これも「ラデツキー行進曲」の



という冒頭のメロディの形を 1 拍ずらしただけで、響きはまったく同じです。

ともあれ、そのあとはもう文字どおり狂瀾怒濤の大宴会となり、トランペットとトロンボーンが主題 A を吹きならし、全オーケストラの叩きつけるようなモチーフ⑩とともにこの楽章は荒々しく幕を閉じます。

さて、いよいよ第 4 楽章ですが、この楽章を徹底的に支配するのがモチーフ⑩です。冒頭のヴァイオリンによる序奏にすらそのモチーフは含まれ、3 小節目から始まる主題 A



を第 1 ヴァイオリンが奏するあいだに、それ以外の弦楽器がモチーフ⑩を再三くりかえします。ちなみに楽章全体でこのモチーフが何回出現するかを数えてみたら 59 にのぼりました。これにこのモチーフの派生型まで加えたら、おそらく 100 は下らないでしょう。

もっとも、いくらなんでも同じモチーフをくりかえすだけでは音楽は持ちません。メロディだって重要です。ファゴットの淋しさにみちたソロ (11) ののち、ふたたび弦楽器で示される主題 B や、



さらにゴウゴウなりをあげる弦楽合奏が突如消えて、最弱音の第1ヴァイオリンの高音に導かれながらしばらくのちに第2ヴァイオリンによって完全な形を表す主題 C など、



どれもみな魅力的ですが、それらに共通するある性格があります。それはこの交響曲の前半で重要な働きをしていたモチーフ⑦と同じく、それらがすべて下降音型によって構成されている、もしくはそれが優勢であるということです。

曲はふたたび主題 A を中心とする動きに戻り (49)、クライマックスに到達すると思われたその瞬間に突然天国的な静かさがあたりをつつみます (73)。その後、管楽器主体の淋しさせまる、主題 C にもとづく部分 (88) をへて、かなり唐突に主題 B が力強く鳴り響きます (107)。そしてそれが混迷の局に到ったとき、ここでもまた一発のシンバルが空間を裂き (121) ヴァイオリン全員の悲鳴としか言いようのない強奏ののち、主題 A が勝利宣言をします (126)。それには大太鼓とそしてシンバルさえもが唱和します (129・130)。

しかし、その熱狂もやがて醒めてゆき、主題 A をふたたび歌い上げようとする試み (142) も不協和音によって妨げられ、諦めの境地に到ったのか、音楽はついにチェロのモチーフ⑩の吹きののち、一瞬とだえます (157・158)。それでも、第2ヴァイオリンが新しい世界へ行こうとやさしく声をかけ (159)、いよいよ弦楽器だけで新たな世界への旅立ちが始まります。その第2ヴァイオリンの上行音型



の8分音符からなる最初の5つの音は、第2楽章の冒頭モチーフ⑧と調性は異なりますが響きはまったく同一です。これは故意か偶然か。かつての楽しい村祭の踊りの遠いかすかな記憶が一瞬よぎったのでしょうか。

このあと曲は、主題 B が少し奏でられたあとふたたび中断します (162)。その後、例の「ターラララ」のモチーフ⑩およびその断片を用いながら、音楽は向こうの世界へと深く深く入ってゆき、最後にヴィオラがメッセージを発して、この交響曲は私たちを未知の深淵へと連れて行ってくれるのですが、その最後のヴィオラのメッセージには驚愕すべき仕掛けがほどこされているのです。

モチーフ⑩の「ターララララ」という音型の後半の「ララララ」という部分はある音から下に2つ下がつて

ひとつ上がるという形になっていますね。この形はそれが最初に第3楽章に登場したときからただの一度もくずされたことはありません。ところが、下にかかげるのは、この交響曲全体の最後の2小節におけるヴィオラの音型です。ご覧ください。



これまでのものとは形がまったく逆になっていて、上に2つ上がってからひとつ下がっています。そうすると、どういうことが起きるのでしょうか。この曲全体の最後の2つの音が形作るものこそ「長2度の下降音型」なのです！

第4楽章では主題A・B・Cすべてにおいて下降音型が用いられることによって楽曲全体の前半との関連性が暗示されてはいましたが、この最後のヴィオラにおいて、モチーフ⑩が逆むきにされることによってモチーフ⑩とモチーフ⑦はひとつになるのです。妙なたとえをすれば、この交響曲が誕生した瞬間のオギャーという声も、天寿をまっとうしての臨終の床の上での最期の声も、「長2度の下降音型」になっている、つまり同じことをしゃべっているのです。生と死のつながりというイメージを、マーラーは単純きわまりないたった2つの音のつながりによって見事に示してくれているのではないのでしょうか。

さらに、この交響曲の全体的な関連性は、今のべたようなモチーフの処理によってのみ達成されているではありません。

調性という点から見ると第1楽章がニ長調（シャープが2つ）で第2楽章がハ長調（シャープもフラットもなし）です。この2つの調は、そのあいだのト長調（シャープがひとつ）をはさんで、かなりの親和性があります。さらに第3楽章は、第2楽章のハ長調の平行調のイ短調（シャープもフラットもなし）なので、第2楽章とは兄弟のようなものです。ところが第4楽章は変ニ長調、すなわちフラットが5つもつきます。第1楽章の基音がレ、第4楽章のそれは半音下のレ♭なので、それぞれの調を構成する諸和音でこの2つの調が共有できるものは何ひとつありません。それならば、この両端楽章は響きの点でまったく関連性がないのでしょうか。

いえいえ、マーラーともあろう人がそんな手ぬかりをするはずがありません。ニ長調の主和音をもっとも簡単に書けば以下のとおりです。



そして、この第1楽章の主調であるニ長調の和音が、なんと変ニ長調を主体とする第4楽章のそこここに巧妙に隠されているのです。具体的には、小節番号でいうと、19の3拍目、51の3拍目、63、67、79、100、

122、146、149、154、166 の 4 拍目（一部にドやシの音も入るものも含みます）の 11 箇所ですが、なかでも、ニ長調の最後の登場となる 166 小節の 4 拍目はこう記されています。



一見したところフラット系の和音のように見えますがソ♭はファ＃と同じことであり、ミ♭♭はレと同じことなので、実際に響く音はこうなります。



これは先にあげたニ長調の和音のいちばん上にあるラの音を 1 オクターヴ下げただけのものであり、純然たるニ長調の和音です。それなら、最初からそう書けばいいだろうと文句を言うのは誰ですか？このように一見それと分かりにくい、分かる人にしか分からないと言う書き方をするのがマーラーという人なのです。こういうところにしびれることのできる人でなければ真のマーラー・ファンとは言えません。

最初の 3 つの楽章で親和性の高い調性が並んだところで、最後の第 4 楽章にはフラットが 5 つもつく変ニ長調という、調的にはそれに先立つ 3 つの楽章とはまったく違う世界が展開しています。しかしマーラーはそのたくみな作曲技術によって、この交響曲を聴き始めたときに私たちのなかに植えつけられたニ長調の世界への郷愁というサブリミナル（意識下）を 11 回にわたって刺激しているのです。そのことによってこの両端の楽章は、「長 2 度の下降音型」を 4 回繰り返すという、いささか見え見えのモチーフ処理（2 3、7 2 および 1 3 2）と最後のヴィオラの 2 つの音以外モチーフ的になんの関連も持ってはいなくても、変ニ長調のなかに見えかくれするニ長調という仕掛けによってアクロバティックな調的関係を持たされているのです。

このように、この交響曲は、一見したところその 4 つの楽章がバラバラに存在するように見えて、実はモチーフ的にも調的にも、マーラーのしたたかな計算のもとにきわめて統一性のとれたものとなっているのです。

Member

Conductor

齊藤栄一

1st Violin

岡村昂洸

奥野葵

近藤和

笹川萌

鈴木満里奈

砂川湧

高杉暁音

高橋広

高原苑

中村隆宏

久光幹太

日比俊太

村部一星

◎ 森勇人

藪野三音奈

山本雪菜

渡邊梓

2nd Violin

荒金香帆

池田優太

伊丹志織

遠藤颯

大森華希

岡田莉沙

落合友佳里

櫻田雅信

祐成秀樹

鈴木紗羅

○ 田代新

中川涼加

中野宏亮

日比茉優

前澤郁弥

渡部友賀

Viola

伊奈裕貴

大澤愛紬

岡本理咲

奥野大志

小田中里奈子

落合純一

高岡広太郎

高橋熙

平田拓也

前田あゆ美

○ 宮崎春菜

山本祐希奈

Violoncello

石井素晴

大久保雅子

荻原理奈

加藤碧子

金澤直人

木田萌子

洪昌秀

鈴木美知瑠

○ 原田大成

Contrabass

石附鈴之介

上野未夢

片山朔杜

小島辰仁

櫻井望

壽川賢太

山六真由

○ 和田輝羽

Flute

大山司

○ 小川真央

斎藤美唯

滝原真琴

牧野美空

Oboe

秋葉晴香

○ 菅野勇斗

黒川達郎

山本菜緒

Clarinet

- 越智健介
清水樹土
田中秀和
中田彩夏
○ 山岸雄作
山根祐真

Bassoon

- 薄井潤一郎
柿崎丈青
野口滉太
萩田智樹

Horn

- 池水香穂
大場祐香
片山銘弥
○ 清水颯太
平井美冬

Trumpet

- 倉林佳祐
○ 神山優美
清水星那
中瀬涼太

Trombone

- 青木俊輔
○ 石井志歩
星野宗隆

Tuba

- 井上拓

Percussion

- 安西理玖
○ 高良佑佳
箱田健太
茂木沙織
築田喜久子

Harp

- 東森真紀子

◎：コンサートマスター

○：パートトップ

運営委員

- 委員長 清水颯太
委員 小川真央
菅野勇斗
高良佑佳
小染慶
野口滉太
宮崎春菜
山岸雄作

フライヤーデザイン

- 水本紗恵子

〈次回演奏会のご案内〉

エセンツ・フィルハーモニカー 第3回演奏会

2023年3月12日(日) 13:30開演予定

ミュウザ川崎シンフォニーホール

指揮：齊藤栄一

マーラー 交響曲第6番 イ短調 「悲劇的」

ストラヴィンスキー 葬送の歌



第2回

国立マーラー音楽祭

2022.12.16

一橋大学管弦楽団

指揮：佐々木新平

所沢市民文化センターミュージズ アークホール

交響曲第1番

2023.1.7

国立マーラー楽友協会

指揮：齊藤栄一

南大沢文化会館 主ホール

交響曲第9番

2023.3.12

エセンツ・フィルハーモニカー

指揮：齊藤栄一

ミュージザ川崎シンフォニーホール

交響曲第6番

2023.5.21

水星交響楽団

指揮：齊藤栄一

すみだトリフォニーホール 大ホール

交響曲第5番

KUNITACHI MAHLER FEST 22-23

KUNITACHI MAHLER FEST 22-23

国立を活動拠点とする一橋大学管弦楽団には、毎年年末年始にマーラーの交響曲第9番を有志で演奏するという類稀なる文化があります。このような学生時代を過ごす団員、およびOB・OGはマーラーを愛してやみません。

創立100周年を迎えた2019年には、一橋オケゆかりの団体と共に「国立マーラー音楽祭」を開催、マーラーの交響曲第2番、8番、9番、10番を演奏し、盛況を博しました。

そしてこの度、2022年12月から2023年5月にかけて、再び一橋オケとそのゆかりの団体、国立マーラー楽友協会、エッセツ・フィルハーモニカー、水星交響楽団が4つのマーラーの交響曲を演奏します。「第2回国立マーラー音楽祭」として、マーラーづくしの半年を皆様と楽しめれば幸いです。

国立マーラー音楽祭 第2回

2022.12.16 [金] 夜公演 一橋大学管弦楽団 第70回定期演奏会

創立1919年、日本のアマチュア・オーケストラとして最も古い歴史を持つ団体の一つ。現在は都内10以上の大学から110人程度の団員を抱え、年3回のコンサートを中心に活動を行なっている。70回目の節目となる定期演奏会でマーラーの交響曲1番を演奏する。

曲目：マーラー／交響曲第1番 他

指揮：佐々木新平

場所：所沢市民文化センターミュージック
アークホール

チケット詳細未定

お問い合わせ：info.hit.concert@gmail.com

ホームページ：https://jfn.josuikai.net/circles/orchestra/

2023.1.7 [土] 13:30開場・14:00開演(予定) 国立マーラー楽友協会 New Year Concert 2023

1983年、国立地区のマーラー好きが中心となって設立。途中休止期間を挟みつつも年1回マーラーの交響曲第9番を齊藤栄一氏の指揮で演奏し続けている。会員にとっては「第9」というとベートーヴェンではなくマーラーの「第9」のことを指す。

曲目：マーラー／交響曲第9番

指揮：齊藤栄一

場所：南大沢文化会館 主ホール
入場無料・全席自由

ホームページ：http://ktmahler.g1.xrea.com/

2023.3.12 [日] 13:00開場・13:30開演(予定) エッセツ・フィルハーモニカー 第3回演奏会

2020年、一橋大学管弦楽団の若手OB・OGを中心に結成。過去の演奏会でベートーヴェンやブルックナーなどに取り組んだ他、2022年8月にはマーラーの交響曲第9番を演奏。再びマーラーの難曲に挑む。団名に冠したエッセツ(独語:Essenz)は「本質・真髄」といった意味を持つ。

曲目：マーラー／交響曲第6番

ストラヴィンスキー／葬送の歌

指揮：齊藤栄一

場所：ミュゼ川崎シンフォニーホール
チケット詳細未定

お問い合わせ：essenz.philharmoniker@gmail.com

Twitter：@Essenz_phil

2023.5.21 [日] 13:30開演(予定) 水星交響楽団 第65回定期演奏会

1984年の結成以来、常任指揮者齊藤栄一氏のもと、マーラー交響曲演奏は20回弱。チクルスはあと10番を演奏すればコンプリート。今回は2019年の第8番以来4年ぶり。第5番は1990年・2001年(長野演奏旅行)・2002年と3回演奏しており、4巡目は初となる。進境著しい若手マーレリアンと長年のマーラー経験を経たシニア世代との熱い演奏にご期待ください。

曲目：マーラー／交響曲第5番

ブリテン／ヴァイオリン協奏曲

指揮：齊藤栄一

ソリスト：西江辰郎

(新日本フィルハーモニー交響楽団 コンサートマスター)

場所：すみだトリフォニーホール 大ホール
全席指定・1500円(予定)

ホームページ：https://suikyo.jp/

●公演内容につきましては変更が生じる場合がございますので、ご了承ください。

●演奏会の最新情報、チケットのご購入方法等は、各団体のホームページや公式SNSをご確認ください。